朝日カルチャーセンター・新宿教室「三国志 個性豊かなヒーローたち」　講師:加藤　徹
第四回「孫権　実は意外に有能だったが・・・」　２０１６年９月１２日

★大辞林 第三版の解説

そんけん【孫権】(182 ～ 252)　中国、三国時代、呉の初代皇帝（在位 222 ～ 252)。孫堅の次子。蜀の劉備と結んで曹操の南下を赤壁に阻止し、江南に勢力を確立。

参考　父・孫堅(１５５/１５６－１９１/１９２)　兄・孫策(１７５－２００)
曹操(１５５－２２０)　劉備(１６１－２２３)　諸葛孔明(１８１－２３４)

くれ【呉】① 古く、中国の呉(ご)の国をいった語。江南地方をもいい、また、広く中国を意味した。② 中国伝来の事物である意の複合語を作る。「－竹」「－楽（くれがく)」

しゅうゆ【周瑜】(175 ～ 210)　中国、三国時代の呉の武将。字あざなは公瑾。孫権を助け呉の建国の基礎を築いた。208 年赤壁の戦いで曹操を破ったが、四川攻略直前に病死。

ろしゅく【魯粛】(172 ～ 217)　中国、三国時代、呉の功臣。字は子敬。周瑜とともに孫権に仕え、赤壁の戦いでは主戦論を唱えた。その後、親劉備の立場を取りつつ荊州の経営に務めた。

たいきょうしょうきょう【大喬小喬】中国三国時代、美貌と才気で知られた呉の姉妹。姉が大喬、妹が小喬で共に兵書を好み、孫策・周瑜の妻となった。二喬。

ごかのあもう【呉下の阿蒙】〔魯粛が呂蒙に会った時、その学識が以前より深まり豊かなのに驚いて、君は呉にいた頃の武略に長じているだけの阿蒙（「阿」は発語）ではない、と言ったという「三国志呉書呂蒙伝注」の故事から〕 学識や人物などが、昔のままで進歩のない者。呉下の旧阿蒙。

★日本の古墳から出土した、呉の孫権の治世の年号が入った銅鏡
赤烏元年(２３８)銘　山梨県市川三郷町大塚　鳥居原狐塚古墳
赤烏七年(２４５)銘　兵庫県宝塚市安倉南１丁目　安倉高塚古墳

★【孫策と周瑜】十八史略
孫堅之子策、与弟権留富春。遷于舒。堅死、策年十七。往見袁術。得其父余兵。策十余歳時、已交結知名。舒人周瑜、与策同年。亦英達夙成。至是従策起。策東渡江転闘、所向無敢当其鋒者。百姓聞孫郎至、皆失魂魄。所至一無所犯。民皆大悦。
孫堅の子・策、弟・権と富春に留まる。舒(じょ)に遷(うつ)る。堅死するとき、策、年十七。往(ゆ)きて袁術に見(まみ)ゆ。其の父の余兵を得たり。策十余歳の時、すでに交結して名を知らる。舒人(じょひと)周瑜(しゅうゆ)、策と同年なり。亦た英達(えいたつ)夙

成(しゅくせい)なり。是(ここ)に至りて策に従ひて起る。策、東のかた江を渡りて転闘し、向ふ所敢て其の鋒に当る者無し。百姓(ひゃくせい)、孫郎の至るを聞き、皆、魂魄を失ふ。至る所、一も犯す所無し。民、皆、大いに悦ぶ。

★【孫策から孫権へ】十八史略

孫策既定江東、欲襲許。未発。故所殺呉郡守許貢之奴、因其出猟、伏而射之。創甚。呼弟権代領其衆曰、挙江東之衆、決機於両陣之間、与天下争衡、卿不如我。任賢使能、各尽其心以保江東、我不如卿。卒。年二十六。

孫策、既に江東を定め、許を襲はんと欲す。未だ発せず。故(もと)、殺す所の呉郡の太守・許貢(きょこう)の奴(ど)、其の出でて猟するに因りて、伏して之を射る。創(きず)甚(はなは)だし。弟・権を呼びて、代はりて其の衆を領せしめて曰く「江東の衆を挙げて機を両陣の間に決し天下と衡(こう)を争ふは、卿(けい)我に如かず。賢を任じ能を使ひ各ゝ其の心を尽くさしめて以て江東を保つは、我、卿に如かず」と。卒す。年二十六なり。

★吉川英治『三国志』孔明の巻より

孫策は、いまにも絶えなんとする呼吸であったが、強いて微笑しながら、枕の上の顔を振った。

「(略)孫権、(略)おまえには内治の才がある。しかし江東の兵をひきいて、乾坤一擲(けんこんいってき)を賭けるようなことは、おまえはわしに遠く及ばん。……だからそちは、父や兄が呉の国を建てた当初の艱難(かんなん)をわすれずに、よく賢人を用い有能の士をあげて、領土をまもり、百姓を愛し、堂上にあっては、よく母に孝養せよ」

★吉川英治『三国志』赤壁の巻より

北に拠った曹操は、すなわち天の時を得たものであり、南の孫権は、地の利を占めているといえよう。将軍はよろしく人の和をもって、それに鼎足の象(かたち)をとり、もって、天下三分の大気運を興すべきである――と、孔明は説くのであった。

★【赤壁の戦い・一】十八史略

曹操撃劉表。表卒。子琮挙荊州降操。劉備奔江陵。操追之。備走夏口。操進軍江陵、遂東下。亮謂備曰、請求救於孫将軍。亮見権説之。権大悦。

曹操、劉表を撃つ。表卒す。子の琮(そう)、荊州を挙げて操に降る。劉備、江陵に奔(はし)る。操、之を追ふ。備、夏口に走る。操、軍を江陵に進め、遂に東に下る。亮、備に謂ひて曰く「請ふ、救ひを孫将軍に求めん」と。亮、権に見(まみ)えて之に説く。権、大いに悦ぶ。

★吉川英治『三国志』赤壁の巻より

孔明の静かなひとみは、時折、孫権の面にそそがれた。

孫権の人相をうかがうに碧瞳紫髯(へきどうしぜん)――いわゆる眼は碧にちかく髯(ひげ)は紫をおびている。漢人本来の容貌や形態でない。

また腰かけていると、その上躯は実に堂々と見えるが、起つと腰から下がはなはだ短い。

これも彼の特徴であった。
孔明は、こう観ていた。
（これはたしかに一代の巨人にはちがいない。しかし感情昂(たか)く、内は強情で、精猛なかわりに短所も発し易い。この人を説くには、わざとその激情を励ますのがよいかも知れぬ）

★【赤壁の戦い・二】十八史略

操遣権書曰、今治水軍八十万衆、与将軍会猟於呉。権以示群下。莫不失色。張昭請迎之。魯粛以為不可、勧権召周瑜。瑜至。曰、請得数万精兵、進往夏口、保為将軍破之。権抜刀斫前奏案曰、諸将吏敢言迎操者、与此案同。遂以瑜督参万人、与備并力逆操、進遇於赤壁。

操、権に書を遣(おく)りて曰く「今、水軍八十万衆を治め、将軍と呉に会猟せん」と。権、以て群下に示す。色を失はざるもの莫(な)し。張昭、之を迎へんと請ふ。魯粛、以て不可と為し、権に勧めて周瑜を召さしむ。瑜至る。曰く「請ふ、数万の精兵を得て、進みて夏口に往き、保(ほ)して将軍の為に之を破らん」と。権、刀を抜きて前の奏案を斫(き)りて曰く「諸将吏、敢て操を迎へんと言ふ者は、此の案と同じからん」と。遂に瑜を以て参万人を督せしめ、備と力を併せて操を逆(むか)へ、進みて赤壁に遇ふ。

★吉川英治『三国志』赤壁の巻より

孫権はいきなり立って、佩(は)いている剣を抜き払い、
「曹操の首を断つ前に、まずわが迷妄から、かくのごとく斬るっ！」
と、前の几案(つくえ)を、一揮(いっき)に、両断して見せた。
そしてその剣を、高々と片手にふりあげ、
「今日以後、ふたたびこの問題で評議はすまい。汝ら、文武の諸大将、また吏卒にいたるまで、かさねて曹操に降伏せんなどと口にする者あらば、見よ、この几案と同じものになることを！」

２２【赤壁の戦い・三】十八史略

瑜部将黄蓋曰、操軍方連船艦、首尾相接、可焼而走也。乃取蒙衝・闘艦十艘、載燥荻枯柴、灌油其中、裹帷幔、上建旌旗、予備走舸、繋於其尾。先以書遣操、詐欲降。時東南風急。蓋以十艘最著前、中江挙帆、余船以次俱進。操軍皆指言、蓋降。去二里余、同時発火。火烈風猛、船往如箭。焼尽北船、烟焰漲天。人馬溺焼、死者甚衆。瑜等率軽鋭、靁鼓大進。北軍大壊、操走還。後屢加兵於権、不得志。操歎息曰、生子当如孫仲謀。向者劉景昇児子、豚犬耳。

瑜の部将・黄蓋、曰く「操軍、方(まさ)に船艦を連ね、首尾相接す。焼きて走らすべし」と。乃ち蒙衝(もうしょう)闘艦十艘を取り、燥荻枯柴(そうてきこさい)を載せ、油を其の中に潅(そそ)ぎ、帷幔(いまん)に裹(つつ)み、上に旌旗(せいき)を建て、予め走舸(そうか)を備へ、其の尾に繋ぐ。先づ書を以て操に遣り、詐(いつは)りて降らんと欲すと為す。時に東南の風、急なり。蓋、十艘を以て最も前に著(つ)け、中江に帆を挙げ、余船、次(じ)を以て倶(とも)に進む。操の軍、皆、指さして言ふ「蓋、降る」と。去ること二里余、同時に火を発す。火、烈しく、風、猛く、船の往くこと箭(や)の如し。北船を焼き尽くし、

烟焔(えんえん)天に漲る。人馬、溺焼し、死する者、甚だ衆(おほ)し。瑜ら、軽鋭(けいえい)を率ゐて靁鼓(らいこ)して大いに進む。北軍、大いに壊(やぶ)る。操、走り還る。後、屢ゝ兵を権に加ふれども、志を得ず。操、嘆息して曰く「子を生まば当(まさ)に孫仲謀(そんちゅうぼう)の如くなるべし。向者(さき)の劉景昇の児子は豚犬のみ」と。

「暖かな風に曹操気が付かず」柳多留３９篇

★賴山陽「詠三国人物十二絶句」より

十、仲謀

生子当如孫仲謀　子を生まば当(まさ)に孫仲謀の如くなるべし
不関天塹護金甌　関せず　天塹の金甌(きんおう)を護るを
可憐却被曹瞞餌　憐れむべし　却って曹瞞に餌(ゑ)ばせられ
力竭荊襄斗大州　力竭(つ)く　荊襄(けいじょう)　斗大の州に

天塹・・・=孫権の呉が「長江天塹」のおかげで「金甌無欠」であったことを指す。
斗大=斗くらいの大きさしかない、ちっぽけなさま

[大意]

孫権は、残念な英雄だった。赤壁の戦いで曹操に勝ったときは、曹操から「もし子供をもうけるなら、孫権のような立派な人物がいい」と言われたほど評価された。呉は、長江という天然の要害に守られていたが、若い孫権の政治的才能も立派だった。

後に曹操は、荊州の地を餌に孫権を釣り、呉が劉備の蜀と争うようにしむけた。孫権は、まんまと曹操の策にひっかかった。彼の覇業の勢いは、ちっぽけな荊州で尽きてしまったのだ。惜しいかぎりだ。

[参考]賴山陽は文政五年にも「孫権」を七絶に詠んでいる。

天塹自堪誇北人。菰蘆叢裡足君臣。蓴羹不肯輸羊酪、領得江東千里春。

十一、周瑜

東風焼尽北軍船　東風　焼き尽す　北軍の船
烟滅長江不見痕　烟(けむり)　滅して　長江　痕を見ず
怪得頻頻曲辺顧　怪しみ得たり　頻頻　曲辺に顧みるに
還無一顧向中原　還(ま)た一顧として中原に向かふ無きを

曲辺顧=「周郎顧曲」の故事。

[大意]

赤壁の戦いで、東風が吹いた。周瑜が司令官をつとめる呉軍は、火攻めにより、曹操軍の船団を焼き払った。煙が消えたあと、長江の水面には、曹操軍はあとかたもなかった。曹操の本拠地である中原に攻め込む、絶好のチャンスだ。

しかし周瑜は、中原侵攻作戦を一顧だにしなかった。音楽の才能に恵まれ、酔っ払っていても楽隊の些細なミスを聞くとすぐに振り返ったという周瑜が、中原を振り返らなかった理由は、わからない。

★【劉備、荊州を得る】十八史略

劉備徇荊州・江南諸郡。周瑜上疏於権曰、備有梟雄之姿。而有関羽・張飛、熊虎之将。聚此参人在疆埸。恐蛟龍得雲雨、終非池中物也。宜徙備置呉。権不従。瑜方議図北方。会病卒。魯粛代領其兵。粛勧以荊州借劉備。権従之。

劉備、荊州・江南諸郡を徇(となな)ふ。周瑜、権に上疏(じょうそ)して曰く「備は梟雄の姿(し)有り。而して関羽・張飛、熊虎(ゆうこ)の将有り。此の参人を聚(あつ)めて疆埸(きょうえき)に在らしむ。恐らくは蛟龍の雲雨を得ば、終に池中の物に非ず。宜しく備を徙(うつ)して呉に置くべし」と。権、従わず。瑜、方(まさ)に北方を図らんことを議す。会ゝ(たまたま)病(や)みて卒す。魯粛(ろしゅく)、代りて其の兵を領す。粛、権に勧めて荊州を以て劉備に借(か)さしむ。権、之に従ふ。

「大きいは耳ばかりかと孫夫人」柳多留６３篇

★【呉下の阿蒙にあらず】十八史略

権将呂蒙、初不学。権勧蒙読書。魯粛後与蒙論議。大驚曰、卿非復呉下阿蒙。蒙曰、士別参日、即当刮目相待。

権の将呂蒙(りょもう)、初め学ばず。権、蒙に勧めて書を読ましむ。魯粛、後に蒙と論議す。大いに驚きて曰く「卿は復(ま)た呉下の阿蒙に非ず」と。蒙曰く「士別れて参日ならば、即ち当(まさ)に刮目して相待つべし」と。

★【魏と呉の講和】十八史略

帝恥関羽之没、自将伐孫権。権求和不許。権遣使於魏。魏封権為呉王。魏主問呉使趙咨曰、呉王頗知学乎。咨曰、呉王任賢使能、志存経略。雖有余閑博覧書史、不效書生尋章摘句。魏主曰、呉難魏乎。咨曰、帯甲百万、江・漢為池。南難之有。曰、呉如大夫者幾人。咨曰、聡明特達者、八九十人。如臣之比、車載斗量不可勝数。

帝、関羽の没せしを恥ぢ、自ら将として孫権を伐つ。権、和を求むれども許さず。権、使ひを魏に遣はす。魏、権を封じて呉王と為す。魏主、呉の使ひの趙咨(ちょうし)に問ひて曰く「呉王、頗る学を知れるか」と。咨、曰く「呉王は賢を任じ能を使ひ、志、経略に存す。余閑有れば博く書史を覧ると雖も、書生の章を尋ね句を摘むに效(なら)はず」と。魏主、曰く「呉は魏を難(はばか)るか」と。咨、曰く「帯甲百万、江・漢を池と為す。何の難ることか之れ有らん」と。曰く「呉に大夫の如き者幾人かある」と。咨、曰く「聡明特達の者、八九十人あり。臣の如きは車に載せ斗もて量(はか)るとも勝(あ)げて数ふべからず」と。

★吉川英治『三国志』出師の巻

「使節に問うが、汝の主人孫権は、ひと口にいうと、どんな人物か」

趙咨(ちょうし)は鼻のひしげた小男であったが、毅然として、

「聡明仁智勇略のお方です」

(略)やがて曹丕(そうひ)は、趙咨にむかって、あえてこういう言葉を弄した。

「朕はいま、心のうちに、呉を伐たんかと考えておる。汝はどう思うか」

趙咨は額をたたいて答えた。

「や。それも結構でしょう。大国に外征をする勢力があれば、小国にもまた守禦あり機略あり、何ぞ、ただ畏怖しておりましょうや」
「ふーむ。呉人はつねにも魏を怖れておらないというか」
「過大に恐れてもいませんが、過大に莫迦にしてもおりません。わが精兵百万、艦船数百隻、三江の嶮を池として、呉はただ呉を信じているだけであります」
曹丕は内心舌を巻いて、
「呉の国には、汝のような人物は、どれほどおるか」と、また訊ねた。
すると趙咨は腹をかかえて笑い出し、
「それがし程度の人間なら桝(ます)で量って車にのせるほどあります」と、いった。
ついに曹丕は三嘆してこの使者を賞めちぎった。

★【蜀、呉と講和】十八史略
亮乃遣鄧芝、使呉修好。芝見呉王曰、蜀有重険之固。呉有参江之阻。共為脣歯、進可兼并天下、退可鼎足而立。呉遂絶魏専与漢和。
亮、乃ち鄧芝(とうし)を遣はし、呉に使ひして好(よし)みを修めしむ。芝、呉王に見(まみ)えて曰く「蜀に重険(じゅうけん)の固(かた)め有り。呉に参江の阻(そ)有り。共に脣歯(しんし)と為らば、進みては天下を兼并(けんぺい)す可く、退きては鼎足(ていそく)して立つべし」と。呉、遂に魏と絶ち、専ら漢と和す。

★吉川英治『三国志』出師の巻
「呉が蜀と同盟を結びました」
折も折、侍中辛毘(しんび)からこう聞かされたとき、皇帝曹丕(そうひ)は、
「まちがいであろう」と、ほんとにしなかった。
しかし次々の報告はうごかすべからざる事実を彼の耳に乱打した。曹丕は怒った。
「よしっ、そう明瞭になればかえって始末がいい。峡口の進攻にぐずぐずしていたのもこのために依るか。この報復は断じて思い知らせずにはおかん」
一令、直ちに南下して、大軍一斉に呉を踏みつぶすかの形勢を生んだ。

★【南船北馬】十八史略
魏主以舟師撃呉。呉列艦于江。江水盛長。魏主臨望、歎曰、我雖有武夫千群、無所施也。於是還師。
魏主、舟師(しゅうし)を以て呉を撃つ。呉、艦を江に列す。江水盛長す。魏主、臨み望みて歎じて曰く「我、武夫、千群有りと雖も、施す所無きなり」と。是(ここ)に於いて師を還す。

★【波濤、洶湧す】十八史略
魏主又以舟師臨呉。見波濤洶湧、歎曰、嗟乎、固天所以限南北也。
魏主、又、舟師を以て呉に臨む。波濤の洶湧(きょうよう)するを見て、歎じて曰く「嗟乎(ああ)、固(まこと)に天の南北に限る所以(ゆゑん)なり」と。

★【処士、管寧】十八史略

処士管寧、字幼安。自東漢末、避地遼東参十七年。魏徴之。乃浮海西帰。拝官不受。

処士・管寧(かんねい)、字は幼安。東漢の末より、地を遼東に避くること参十七年。魏、之を徴(め)す。乃ち海に浮かびて西に帰る。官に拝すれども受けず。

★【孫権、皇帝を称す】十八史略

呉王孫権、自称皇帝於武昌、追尊父堅、為武烈皇帝、兄策為長沙桓王。已而遷都建業。

呉王・孫権、自ら皇帝を武昌に称し、父・堅を追尊して武烈皇帝と為し、兄・策を長沙桓王(ちょうさかんおう)と為す。已(すで)にして都を建業に遷(うつ)す。

★【孫権の死】十八史略

呉主殂。謚曰太皇帝。子亮立。

呉主殂(そ)す。謚(おくりな)して太皇帝と曰ふ。子亮立つ。

参考・呉王朝の皇帝

1孫権（大帝）　2孫亮（会稽王・廃帝）

3孫休（景帝）　4孫皓（末帝。帰命侯。孫権の孫）